

第 69 回分析化学討論会 (2008 年, 名古屋)

第 69 回分析化学討論会は、2008 年 5 月 15 日 (木) と 16 日 (金) の両日、名古屋国際会議場で開催された。

名古屋国際会議場は、JR 名古屋駅や中部国際空港からのアクセスが極めてよい金山総合駅から地下鉄で 1 駅の位置にある。全国的に有名な熱田神宮に程近く、水族館や南極観測船「ふじ」などの観光施設のある名古屋港へも地下鉄 1 本で行くことができる。国際会議室、イベントホール、レセプションホール、展示室や大小 22 の会議室に加えて、レストランを擁する本格的な会議場であり、国際・国内会議はもとより、各種イベントやコンサートも常時開催されている。

討論会実行委員会は、中部支部役員を含む 49 人で組織され、1 年ほど前から準備を始めた。討論会といえば風光明媚な地での開催が通例であり、参加意欲をくすぐる要因となっている。これに対して、名古屋はいつでも行ける通過駅であり、学会を開催しても人が集まらないという定説も囁かれていた。加えて、2005 年秋には第 54 年会が名古屋大学で大々的に開催されたばかりであった。前年の宇都宮大学での討論会が魅力的な企画が満載であり、非常に盛況であっただけに、参加者の大幅な減少も危惧され、平出正孝 (名大院工) 実行委員長にとっては胃腸薬の欠かせない日々が続いた。さらに追い打ちをかけるように、前の週には季節外れの台風 2 号が発生し、日本に近づいてきた。幸いにも、前日朝までの大荒れの天気とはうって変わって、会期中は穏やかな晴天に恵まれた。参加者は 1081 名 (予約登録 715 名、当日登録 310 名、名誉会員 7 名、テクノレビュー登録 25 名、展示関係者 24 名) に達した。講演件数は 568 件 [論文賞講演 1 件、依頼講演 9 件、主題講演 28 件、一般講演 (口頭) 241 件、一般講演 (ポスター) 134 件、若手ポスター講演 130 件、テクノレビュー講演 (口頭) 13 件、テクノレビュー講演 (ポスター) 12 件] であった。

本討論会では、三つの主題を中心に討論がなされた。討論主題は以下のとおりである。

1. 「高度分離へのたゆまぬ挑戦」

新たな分離媒体の開発や分離プロセスのマイクロ化・集積化・多機能化によって、かつてない高効率な分離分析法が実現し、医療分析や環境分析をはじめとする広範な分野にブレークスルーをもたらした。分離システムの高性能化に加え、簡便化・低コスト化・低環境負荷化なども要求されている。本討論会では、高度分離へのたゆまぬ挑戦やその成果について討論した。依頼講演は、「らせん高分子・超分子を用いたキラル物質の分離とセンシングへの応用」(八島栄次先生、名大院工)、「新しい分離場の設計と展開」(岡田哲男先生、東大院理工)、「高機能集積化分離分析システムの構築」(久本秀明先生、阪府大院工) の 3 件であった。

2. 「環境評価技術の新展開」

地球規模の環境汚染が進行するなか、環境分析の重要性が増している。分析値はしばしば人々の考えや政策にさえ影響を及ぼすため、信頼のおける正確な分析値を得ることは分析者の責

務である。本討論会では、環境評価のための新原理や新技術とともに、評価技術によって明らかにされた新たな環境像について討論した。依頼講演は、「海洋微量物質の最近の評価技術」(宗林由樹先生、京大化研)、「粒径別大気粉塵モニタリングの新展開」(古田直紀先生、中大理工)、「水中汚染物質の検出と除去」(田中俊逸先生、北大院地球環境) の 3 件であった。

3. 「産業をささえる分析化学」

世界をリードする我が国の産業において、製品開発や品質維持、安全・安心の確保は様々な分析技術によって支えている。本討論会では、産業の現場で創案された分析の手法や工夫はもちろんのこと、新製品の開発に繋がる分析手段の創案に至るまで広く討論した。依頼講演は、「鉄鋼製造における分析・評価技術」(藤本京子先生ほか、JFE スチール)、「食品の安全性をささえる分析化学」(松本 清先生、九大院農)、「情報産業における分析化学の役割」(水谷晶代先生、富士通研) の 3 件であった。

いずれのテーマも分析化学が社会に求められている重要な課題である。限界に挑戦した最高峰の研究について討論する場を目指し、依頼講演については分野を代表する演者と座長を厳選した。なお、「高度分離へのたゆまぬ挑戦」は「分析化学」誌において、討論会特集の主題に採用された。

本討論会では、分析化学における価値ある成果を広く紹介することを目的として、論文賞受賞講演を新たに設けた。「ガスクロマトグラフィー/プラズマガススイッチング誘導結合プラズマ質量分析法の開発とポリ臭素化ジフェニルエーテル定量への応用」の演題で田尾博明氏 (産総研環境管理) が講演し、満場の聴衆から拍手が鳴り響いていた。

近年、より広く深い討論を目的としたポスター発表の件数が増加する傾向がみられる。本討論会では、中部支部若手実行委員による優秀ポスター賞の企画と積極的な呼びかけにより、130 件の若手ポスター講演が寄せられ、まさに全国の若手が結集した感があった。6 部からなる各セッションにおいて、優秀ポスター賞は三輪託也氏 (三重大)、北隈優希氏 (京大)、山口正人氏 (名大)、吉年正宏氏 (近畿大)、江藤英倫氏 (福岡大)、金村進介氏 (京大) に、「初めての学会発表」部門では、勝浦彩氏 (慶大)、川瀬沙耶佳氏 (上智大)、天野泰至氏 (兵庫大)、野田和孝氏 (名大)、八幡悟史氏 (東北大)、小財友樹氏 (京工繊大) に、30 歳未満の方を対象とした「若手ポスター奨励賞」部門では、藤掛 勉氏 (群馬大)、加藤雄大氏 (阪大)、香村知宏氏 (名工大)、鬼海高明氏 (名大)、佐藤 諒氏 (上智大)、中元浩平氏 (筑波大) に、特に方法や技術的観点から優れた発表に対する「若手メソロジー賞」部門では、安藤真規氏 (名工大)、間中 淳氏 (富山高専)、松本 淳氏 (東工大)、永井孝氏 (山形大)、高崎裕加氏 (名大)、高橋美妃氏 (信州大) に授与された。少子化や理科離れが叫ばれるようになって久しく、日本の産業の将来を懸念する声さえ聞かれる。これに対し、分析化学の分野では、先生方の熱心なご指導や各支部の取

り組みにより、全国各地に優秀な若手が育ってきていることが窺える。今後とも益々の若手育成が進むことが期待される。

懇親会は15日(木)18時から討論会会場に程近い全日空ホテルグランコート名古屋で開催され、277名の参加者があった。平出実行委員長の歓迎の挨拶で始まり、湯地昭夫(名工大院工)中部支部長・中部支部創立50周年記念事業実行委員長の挨拶、渡會 仁(阪大院理)日本分析化学会会長の挨拶をいただいた。乾杯はご来賓としてご出席された田中元治先生にご発声いただいた。懇親会の途中では、2007年度「分析化学」論文賞授賞式が行われ、渡會会長から田尾氏に賞状と副賞が授与された。ついで、会員拡充ポイント上位者の表彰が行われた。最後に、脇田久伸(福岡大薬)第57年会実行委員長、ついで木村恵一(和歌山大システム工)第70回分析化学討論会実行委員長のご挨拶で閉会した。例年のようなアトラクションは行わず、参加者相互の交流の助けになればと広い会場とふんだんな料理や飲み物を用意した。コース料理のほか、「ひつまぶし」、「きしめん」、「手羽先」や「味噌田楽」など名古屋近辺の名物や季節の料理が並べられた。また、中部地方の個性的な地酒を20種類厳選して取り揃えた。料理や飲み物の内容や量にはご満足いただけたようであり、胃袋の容量と時間の不足を訴える声が聞こえた。50周年を迎えた中部支部からの装花が会場にひときわ華を添えていた。

各会場責任者は実行委員の先生の中からお願いした。また、名古屋大学と名古屋工業大学の学部・大学院生43名に会場運営のほか、受付、クローク、案内のためのアルバイトをお願いした。実行委員の先生もアルバイトの方も研究室や自らの発表もある中で、分刻みのスケジュールで献身的に運営に携わっていただいた。パワーポイントによる発表様式が定着する中、ファイル受け取りや映写を確実にかつスムーズに行うことは頭を悩ませる問題である。本討論会では、会場内外のパソコンをLANケーブルでつなぎ、受付でファイルをUSBメモリから共有ホルダーに入れ、会場内のパソコンでPowerPoint Viewerによって開く方式を採用した。座長の先生、会場担当の先生やアルバイトの方々の絶妙な司会・運営により、密度の濃い討論が定刻どおりに進行していった。

本討論会の特色の一つとして、充実した付設展示会が挙げられる。実行委員の先生方の積極的な働きかけとメーカー担当者のご協力により、機器展示22件(24ブース)、カタログ展示11件(9社)のご出展をいただいた。ポスター会場も兼ねた受付横の展示会場は、魅力的な機器展示とポスター講演との相乗効果もあつてか常に活況を呈していた。また、講演要旨集への広告も21社と1団体にお寄せいただいた。討論会においては、広告や展示による収入が運営上不可欠である。関係各位のご支援とご尽力に心から感謝申し上げる。一方、参加者にとっては、展示会やテクノレビューはメーカー担当者から直に最新情報を聞くことのできる貴重な機会である。分析展や東京シンポジウムは東京近郊の方々にとっては便利であるが、地方の者



渡會会長挨拶



若手ポスター賞受賞

にとっては時間や交通費の制約からなかなか参加できないのが実状である。討論会や年会を通じて全国レベルでメーカーとユーザーの交流が密になり、高性能で使いやすい機器や器具の開発・普及が促進されることを期待する。

本討論会開催を通じて、多くの方々にとりかたならぬお世話になりました。中部支部実行委員の先生方はもとより、日本分析化学会本部事務局、オンライン登録委員会、広報委員会、前回討論会・年会実行委員の方々にもご指導・ご鞭撻を賜りました。私どもの気がつかないうちに助けていただいたことも枚挙に遑がありません。誌面の都合でご紹介できない非礼をお詫びするとともに、この場をお借りして心より御礼申し上げます。最後に、多くの方々から祝福のお言葉をいただいたことをご報告いたします。本討論会が成功であったとすれば、ご支援くださったの方々、そして何よりもご参加くださった一人一人のおかげだと思います。皆様には重ねて感謝申し上げるとともに、本討論会に中部支部の仲間とともに実行委員の一人としてかかわることができたことを誇りに思う次第です。

(名古屋大学大学院工学研究科 齋藤 徹)